

ビジネス・コミュニケーションにおける 他動詞＋動詞派生名詞のコロケーション

松 倉 信 幸

“Transitive Verb＋Deverbal Noun” Collocations in Business Communication

Nobuyuki MATSUKURA

1. はじめに

単一動詞を用いて表現する場合よりも、目的語に動詞派生名詞を取ることによって、改まった意味を文脈に与えるため、他動詞＋動詞派生名詞のコロケーションはビジネス・コミュニケーションにおいて、広く好んで用いられる。本稿では、ビジネス・レターに用いられた、他動詞＋動詞派生名詞のコロケーションについて、はじめに他動詞の種類と意味素性、次に頻度の高い動詞派生名詞と他動詞のコロケーションについて、さらに動詞派生名詞の可算性及び非可算性と限定形容詞について、最後に能動態と受動態の使用頻度に見られる特徴について考察を加える。

2. 他動詞の種類と意味

ビジネス・レターに使用され、単一動詞に書き換え出来る、いわば互換性のある動詞派生名詞と共起する他動詞には次のものが上げられる、括弧は頻度数を示す²⁾。

- (1) Make (224), Place (98), Execute (18), Do (14), Have (13), Take (11),
Effect (10), Grant (5), Give (4), Complete (4)

上記において、最も頻度の高いものは‘Make’で、次に‘Place’、‘Execute’と続く。このうち‘Do’には‘Do business’のコロケーションも多く、42例有ったが‘business’は動詞派生名詞から除外されるので、上記には含まれない。また、「手を打つ、方策を講じる」の‘take steps’も14例有ったが、これと他動詞の‘step’は意味上対応しないので、これも含まれない。上記(1)における他動詞の中で注目すべき語の意味と用法を下記に示す。

- (2) Make : with many other nouns to form expressions which take most of their
meaning from the noun. (COBUILD : 1.5)

本論文は、1996年1月20日大阪名浄女子短期大学において開催された、日本商業英語学会関西支部研究会にて口頭発表を行った「ビジネス・コミュニケーションにおける他動詞＋行為名詞のコロケーション」に一部加筆訂正がなされている。

(3) Have : Have is frequently used with nouns as objects, where the word 'have' has very little meaning in itself, but where most of the meaning is given by the noun. (*ibid.*7)

(4) Effect : If you effect something that you are deliberately trying to achieve, you succeed in causing it to happen; a fairly formal use. (*ibid.*8)

(5) Take : Take is used with nouns that refer to physical actions. There is often an equivalent verb, but using 'take' shows that the action is a separate and deliberate one, and not something that goes on indefinitely. It also means that you can give more information about the action.

(*ibid.*1.1)

上記の(2), (3)のように, これらのタイプの動詞の語彙的意味はほとんど無く, 意味の重点は目的語の動詞派生名詞に置かれる。Jespersen(1942 : 117)はこれらの動詞を 'light verbs' または 'an insignificant verb' と呼び, Halliday(1985 : 135)は 'the verb being lexically empty' などと述べている。したがって, 動詞派生名詞の方が述部の実質的な意味を担っており, (5)で述べられているように 'verb-equivalents' (動詞相当語句)と考えられる。また(4)のように, 単一動詞を用いた場合よりも名詞を用い方が改まった表現になる。さらに(5)にある通り, 構造上動詞派生名詞にはその行為に関する, 数個の形容詞が前置可能である。この点, 単一動詞を用いるよりも他動詞+動詞派生名詞の方がより多くの情報量を読み手に提供出来る。さらに, Langacker (1987 : 146) の認知意味論の視点から見ると, 下記(6a)の 'fell' は図1のように動作を時間軸にそった連続的な過程からなる動作としてとらえる。もう一方の(6b)の 'took a fall' は図2のように, 動作を一括的で, 単一的な動作としてとらえる。この点から他動詞+動詞派生名詞の形態は単一動詞を用いる場合と比較すると, 意味上歯切れのよい形態であることが明らかである。

(6) a. He *fell*.

b. He *took a fall*.

連続的スキャンニング

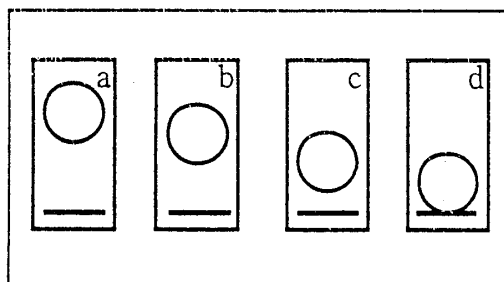


図1

一括的スキャンニング

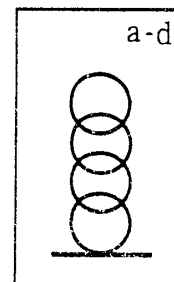


図2

3. 頻度の高い動詞派生名詞と他動詞のコロケーション

最も使用頻度の高いものから、動作派生名詞をあげると次のように示される。

(7) a. Order (118)

Place (97), Execute (17), Make (2), Give (1), Complete (1)

b. Arrangements (32)

Make (31), Complete (1)

c. Payment (31)

Make (29), Effect (2)

d. Decision (20)

Make (19), Have (1)

e. Mistake (11)

Make (11)

f. Delivery (9)

Make (6), Complete (2), Effect (1)

g. Discount (9)

Grant (5), Allow (2), Give (2)

h. Shipment (7)

Effect (5), Make (2)

上記(7e)の‘Mistake’の類義語である‘Error’を用いた場合の‘Make an error’の例は5例見られた。数の上では、圧倒的に(7a)の‘Order’のコロケーションが最も多く118例有り、そのうち‘Place’とのコロケーションが97例であった。また、この‘Order’は‘Place’以外にもほぼ同義で用いられる他動詞も多いのが特徴で有り、このことはそれだけ使用頻度が高い要因の現れであると考えられる。

また、(7a)から(7h)までの動詞派生名詞の中で使用頻度の高い他動詞は‘Make’で、‘Discount’以外の動詞派生名詞との‘Set phrase’になっているのが特徴である。次に‘Make’よりは数は少ないが、‘Effect’は8例有り、‘Payment,’ ‘Delivery,’ 及び‘Shipment’と共に共起する。次に多いコロケーションは‘Complete’が4例有り、‘Order,’ ‘Arrangement,’ 及び‘Delivery’と共に共起する。

4. 動詞派生名詞の可算及び非可算性

動詞派生名詞の可算、非可算について調査する上で、次の構造が考えられる。

(8) a. V + 単数名詞

b. V + 複数名詞

- c. V + a(n) + 単数名詞
- d. V + the + 単数名詞
- e. V + the + 複数名詞
- f. V + 所有形容詞 + 単数名詞
- g. V + 所有形容詞 + 複数名詞
- h. V + this(that, etc) + 単数名詞
- i. V + these(those, etc) + 複数名詞
- j. V + 不定限定詞 + 単数名詞
- k. V + 不定限定詞 + 複数名詞

上記の(8a)から(8k)までを(1)の‘Make’から‘Complete’までに当てはめると次の図3にまとめられる。

図3

	Make	Place	Execute	Do	Have	Take	Effect	Grant	Give	Complete	TOTAL
a	43	5	0	2	3	4	7	0	1	0	65
b	58	22	9	0	1	0	2	0	0	3	95
c	66	42	0	1	9	4	0	4	3	0	129
d	22	11	1	8	0	2	0	1	0	0	45
e	6	1	0	0	0	0	1	0	0	0	8
f	8	12	7	2	0	0	0	0	0	0	29
g	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
h	9	1	1	1	0	0	0	0	0	1	13
i	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
j	2	3	0	0	0	1	0	0	0	0	6
k	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	224	98	18	14	13	11	10	5	4	4	401

上記の図表から、(e)、(g)、(f)、(k)において、定冠詞、所有形容詞、指示形容詞と複数名詞が共起した場合には、‘Make’以外にも‘Place’と‘Effect’に1, 2例あるのみで、‘Make’がどの形態にも見られた。したがって、‘Make’のみ(a)から(k)まで可算、非可算ともにすべての形態に現れている。そしてこれに続くのは‘Place’であるが、この‘Place’も(e)、(g)、(i)の例はそれぞれ1例ずつのみである。また、(c)の不定冠詞に単数名詞が続く例が他の例に比較して多いのは、‘Take a look,’ ‘Give a discount’と言うようにリズム、音調といった音声の面が一因しているものと考えられる。

5. 動詞派生名詞と限定形容詞

動詞派生名詞に前置される限定形容詞は前述したように、構造上、他動詞＋動詞派生名詞の形態において数個の形容詞が前置可能であるため、下記の(9a)から(9c)に見られるように、他動詞のみを用いて表現するよりも、読み手により多くの情報を伝える構造上の利点があげられる。

(9) a. In November we *placed our first order*. (Kench : 186)

b. They may *place further and larger orders*. (King : 78)

c. We may want to *place an occasional supplementary order*. (Kench : 63)

談話の上から見ると、「既知から新へ」、つまり「旧情報から新情報へ」という流れが談話の原則である。話題として確立されたものが主題になり、聞き手(読み手)にとって、未知の新情報が文末に置かれる。さらに、英語では、情報量の多い長い名詞句や節が文末に置かれる。この機能はQnirk *et al.* (1972)によるとEnd-Weight(文末重点)と呼ばれる。これらの情報構造の視点から見ると、(9a)から(9c)について、他動詞＋動詞派生名詞のコロケーションの形態が、この新情報の機能と文末重点の機能を果たしていると考えられる。

次に、この新情報を担う動詞派生名詞に前置される形容詞についても、形容詞と動詞派生名詞とのコロケーションについて下記で述べる。下記(10a)から(10h)に見られるように、動詞派生名詞に前置される形容詞の多いものから上げると、Special (7), Necessary (6), Initial (6), Good (5), Substantial (5), Further (4), Immediate (4), Larger (4)で、これらの限定形容詞と共起する動詞派生名詞は以下に頻度順に上げる。

(10) a. Special (7)

arrangements (3), delivery (1), discount (1), effort (1), offer (1)

b. Necessary (6)

arrangements (3), action (1), adjustments (1), transfer (1)

c. Initial (6)

order (5), contracts (1)

d. Good (5)

choice (1), decision (1), grasp (1), presentation (1), work (1)

e. Substantial (5)

orders (3), discount (1), reduction (1)

f. Further (4)

orders (3), discount (1)

g. Immediate (4)

action (2), payment (2)

h. Larger (4)

orders (4)

6. 能動態と受動態の頻度と特徴

他動詞＋動詞派生名詞の形態で、意味の重点は動詞派生名詞に置かれていることから、(3)で取り上げた動詞派生名詞の(A)能動態と(P)受動態の使用頻度を比較する。

(11) a. Order	A (102)	P (16)
b. Arrangements	A (29)	P (3)
c. Payment	A (13)	P (18)
d. Decision	A (18)	P (2)
e. Mistake	A (5)	P (6)
f. Delivery	A (5)	P (4)
g. Discount	A (9)	P (0)
h. Shipment	A (2)	P (5)

ビジネス・レターにおいて、受動態は表現が間接的で控えめになる。もう一方で能動態は直接的であり、読み手に積極的な印象を与え、効果的なために、通常では受動態よりも能動態が用いられ、受動態の多用は避けられる。

しかし、上記の(11c), (11e), (11f), (11h)のActiveとPassiveの頻度を見ると、ビジネス・レターではあまり使用されないPassiveの頻度の多い点に注目できる。

次に、これら(11c), (11e), (11f), (11h)の動詞派生名詞の他動詞のActiveとPassiveの頻度を下記に取り上げる。

(12) a. Pay	A (40)	P (15)
b. Mistake	A (0)	P (0)
c. Deliver	A (26)	P (34)
d. Ship	A (18)	P (30)

(12b)の‘Mistake’の場合は能動態も受動態も皆無であるが、(12c)と(12d)では能動態よりも受動態のほうが多い点に注目出来る。次に上で述べた動詞派生名詞‘Payment,’ ‘Mistake,’ ‘Delivery,’ ‘Shipment’の例を取り上げる。下記の(13)は‘payment’の例であるが、(13a)では支払う側の動作主を表さずに、‘payment’を主語に置いているため、相手に失礼にならない。また(13b)では‘before’以下の文で、支払いの件のみを述べていて簡潔である。

- (13) a. If *payment has been made*, please ignore this letter. If *payment has not yet been made*, we urge you to send your check now. (Betty : 115)

(お支払いいただけましたら、どうか本状を破棄して下さい。もしまだお支払いいただけてない場合は、すぐに小切手を振り出していただけますようお願い致します。)

- b. We consider that it would be most unwise to ship a second consignment before *payment has been made* for the first. (King : 42)

(最初の委託販売品のお支払い前に、2回目の品を船積みするのはあまり賢明ではな

いと、当社は考えております。)

次の例は‘mistake’の例であるが、動作主を明記しないことにより、手違いの主を示していない。

- (14) a. Evidently *some mistake was made* and the goods have been wrongly delivered. (*ibid.*129)

(明らかに、手違いがあって、その品は誤配されました。)

- b. On going into the matter we find that *a mistake was made* in the packing, through a confusion of numbers. (*ibid.*133)

(その問題を調査していましたら、数え違いにより、梱包に手違いのあることに気が付きました。)

さらに、下記の(15)は‘delivery’の例で、(16)は‘shipment’の例であるが、意味内容からどちらも動作主を特に表さなくともわかることから、(15)の文の品物の配送や、(16)の文の船積みの文脈において、動作主に言及する必要性はあまりないと考えられる。

- (15) a. I telephoned your customer service department twice—May 4 and May 11—and in each case was assured that *delivery would positively be made* by May 15. (Roy : 136)

(私は貴社の顧客サービス課へ5月4日と5月11日に2度お電話致しました。そして、どちらの場合にも間違いなく5月15日に配送していただけると確約していただきました。)

- b. *Delivery can be made* within two weeks of our receiving your order.

(Betty : 84) (ご配送は貴社のご注文の日より2週間以内にさせていただきます。)

- (16) a. *Shipment will be effected* immediately we have your reply. (King : 46)

(当社は貴社のご返事を受け取りしだい船積みいたします。)

- b. Upon receipt of an estimate of your requirements, *shipment will be made*. (Roy : 31)

(貴社の必要品の見積もりを受け取りしだい船積みいたします。)

上記の例及び(11)から、通常受動態は多用すると説得力に欠けるとビジネス・コミュニケーションにおいて考えられているが、上記(13)から(16)で述べた「支払い」、「手違い」、「配送」、「船積み」のコンテキストにおいては、使用頻度が能動態よりも受動態の方が高い点が明らかである。

7. おわりに

本稿ではビジネス・レターにおける他動詞＋動詞派生名詞のコロケーションについて、主に動詞派生名詞とその単一動詞との関係について考察を加えた。下記にこれまで述べたビジネス・

レターにおいて、単一動詞よりも他動詞＋動詞派生名詞の形態が用いられる要因を記す。

1. 単一動詞を用いるよりもその動詞の派生名詞を用いた形態の方が、いわゆる日本語においてひらがなと漢字との関係に相当し、文脈に改まった意味を付与する。
2. 統語構造上、動詞派生名詞にはその行為に関する数個の形容詞を前置することが可能であるため、単一動詞を用いるよりも他動詞＋動詞派生名詞の方がより多くの情報量を提供可能である。
3. 音声学上‘take a look’の例のように、動詞派生名詞を用いる方がリズムや音調の点から歯切れがよい。
4. 情報構造の視点から、この他動詞＋動詞派生名詞の形態が文末に置かれると、この形態が英語の文構造の特性である新情報の機能と文末重点の機能を担っている。

NOTES

本論文で用いたビジネス・レターのテキストを下記に記す。

- Betty & Warner Hutchinson. 1985. *Business Letters Made Simple*. New York : Doubleday.
Kench, A. B. 1972. *The Language of English Business Letters*. London : Macmillan.
King, F. W. & Ann Cree D. 1979. *English Business Letters*. Singapore : Longman.
Roy, W. O. 1994. *The McGraw-Hill Handbook of Business Letters*. Singapore : McGraw-Hill.

REFERENCES

- 秋元実治編.1994.『コロケーションとイディオムーその形成と発達ー』. 英潮社.
Halliday, M.A.K.1985. *An Introduction to Functional Grammar*. London : Edward Arnold.
日比恵子.1992.「‘Have a look構文’について」. ASPHODEL 26.
Jespersen, O.1942. *A Modern English Grammar*. Part VI. Oxford : The Alden Press.
John, A.1995. “Having a look at the expanded predicate.”*The verb in contemporary English*.
Cambridge.
Langacker, R.W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. I, Stanford : University Press.
山梨正明.1995.『認知文法論』. ひつじ書房.